



去る、平成22年4月1日・2日の両日、第122回日本医師会（以下日医）定例議員会が開催された。初日の4月1日には日医会長選が行われ、既報の通り原中新執行部が誕生した。会長選の裏話などは今後明らかになってくると思われるが、特筆すべきことは北海道医師会（以下道医）より推挙され、日医常任理事として活躍していた、中川俊男氏が副会長として選出されたことである。

日本医師会会長選挙

情報広報部

会長選挙を戦っていた。知名度・業績抜群の青柳副会長は選挙戦を有利に進めていたが、中医協委員を兼任していたため、本人としては十分な活動ができなかった。そこで道医・郡市医師会は一丸となり、全国各地に飛び支援を訴えた。危機感を覚えた東京桜井候補・愛知宮崎候補がまず合流し、その後大阪植松候補と連合し、結局植松治雄氏が200票以上を獲得し、植松日医執行部が誕生した。

平成16年5月1日道医報第1028号指標

に長瀬副会長（当時）が日医会長選挙について記載しているので一読いただきたい。この中に興味深い内容が載っている。『選挙運動開始直後、会員からと、代議員会議事運営委員会でも、日医の選挙規定の不備が指摘された。①選挙管理委員会がないこと②当選が有効投票の3分の1で決まること③キャビネット選挙では、複数の候補者があつた時、優秀な人材を失う恐れがあること④代議員の年齢構成から、若い人の意見が入りにくい⑤会員の直接選挙も視野に入れて、会長の選出方法を検討する 等の意見がある。次の選挙の前に、十分な検討をするべく、早急に定款検討委員会を設置する必要があるだろう』

藤原 秀俊

日本医師会定款施行細

則第28条には、『会長選挙においては、有効投票の総数の3分の1以上の得票を得なければならない』と定められている。現在の定款は平成6年1月1日より施行され、以来16年間変化がない。また6年前に問題点として指摘されたことが何も改善されていない（ただし定款検討委員会は設置されている）。

この度の日医会長選挙では、有効投票数356票のうち131票を茨城県医師会長の原中氏が獲得し当選した。現職の唐澤氏は107票、京都府医師会長の森氏は118票で

あつた。上記の定款細則により原中新医師会長は堂々の「3分の1以上」の当選である。しかし問題は残る。3分の2弱の反対があり、今後の会務執行に問題がないのであろうか？代議員の半数以上の賛成がなければ、代表者として発言力が弱いのではないか？定款検討委員会において、今後十分に検討されなければならない。

選挙においては、現職が最も強いものであり、負けても惜敗というのが通常である。その意味で、唐澤前会長は大敗と言つて良い。出馬当初は優勢と言われていたが、その後各都府県の会長・役員選挙が行われ、反唐澤派が次々に当選した。情勢に疎いわれわれにも「唐澤氏不利」と判断できた。唐澤体制が支持されたか否かは、現職ならば「3分の1以上ではなく半数以上」が判断基準であつたかと思われる。

この度の日医選挙において特筆すべきは、キャビネット選挙を行わなかったことである。今回、原中氏が初めに「キャビネット選挙にはしない」と明言したため、他の候補も追隨した。お陰で、中川氏をはじめ、横倉氏・羽生田氏の副会長や、各常任理事には従来にはない多彩な面々が就任した。今後の活躍を期待したい。また政治屋に利用されない医師会であつて欲しいし、政治家の関与もこれを最後にしていただきたい。いつまでも遺恨を残す選挙はもう勘弁してほしい。